

# St. Luke's International University Repository

## The Study on the Effects of the Home Care Assessment Tool of Student Practical Training in Home Visiting.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 成瀬, 和子, 長江, 弘子, 川越, 博美 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10285/386">http://hdl.handle.net/10285/386</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 報 告

# 在宅看護実習における ケアアセスメントツール使用の有用性の検討

成瀬 和子<sup>1)</sup> 長江 弘子<sup>2)</sup> 川越 博美<sup>3)</sup>

## 要 旨

在宅看護実習において看護過程の展開とケアマネジメント概念の理解を深めることを目的として、ケアアセスメントツールを使用した。その結果、直接的な学習効果として、①対象を捉える視点が広がる、②判断の助けになる、③系統的に情報収集できる、また副次的な学習効果として、①現象と知識の統合力の必要性、②問題とニーズの違い、③ツールの結果だけでなく現実の対象者を見ることの大切さ、④解決困難な問題に取り組む姿勢、を認識できたという点において、学習支援教材としての有用性が示唆された。さらに、実習を効果的に行うためには、①ケアアセスメントツールの使用方法の理解、②実習指導者とのコミュニケーションおよび支援が得られる、③医療モデルに適用する困難さの認識、が必要であることが明らかになった。

## キーワード

ケアプラン、アセスメントツール、訪問看護実習

## I. はじめに

聖路加看護大学（以下本学）では、1995年度の新カリキュラム改正時より、四年次に総合実習を導入した。総合実習は、第三段階の実習として位置づけられ、目標として、①関心のある看護領域において、対象と環境との相互作用を力動的に把握し、対象の最適な健康状態を生み出すことができるよう、メンバーの一員として主体的に自らの役割と機能を発揮し、働きかける能力を養う、②看護実践を通して、看護の専門性について考え、自らの看護に対する看護観を深める、ことがあげられている。

在宅看護分野では、在宅療養者の特徴を理解し、訪問看護ステーションでの看護実践のプロセスを学ぶことを目標に、訪問看護ステーションと病院訪問看護部において実習を行っている。2000年度より介護保険が導入され、色々な変化が訪問看護の場にも起こっているが、そのひとつがケアアセスメントツールの使用である。ケアアセスメントツールは、誰でも質が確保されたケアプランが立案できるよう、介護保険の導入に伴い使用が決められ

たものだが、学生にとっては、慣れない在宅の場において実習の目的を果たすためのガイドラインになりうる。ここでは、2週間という短い実習期間中に、学生が生活者の視点をもって対象者をアセスメントできるよう、学習支援ツールとしてケアアセスメントツールを使用した。その結果、学習支援ツールとして使用するためのいくつかの示唆を得たので、報告する。

## II. 研究目的

ケアアセスメントツールの使用が、訪問看護実習における学生の学びにどのような影響をもたらしたかを明らかにし、在宅看護の看護実践のプロセスを学ぶ支援教材としてのケアアセスメントツール使用についての評価を行う。

## III. 実習場所

学生受け入れに実績のある東京都内の訪問看護ステーション2カ所および一般病院訪問看護部1カ所。

- 1) 聖路加看護大学 助手（地域看護学）
- 2) 聖路加看護大学 講師（地域看護学）
- 3) 聖路加看護大学 教授（地域看護学）

## IV. 研究方法

本学4年生で総合実習(1999.7.14~23)で、在宅看護を選択した学生10人に対し、実習期間中受け持ちケース(2-3例)に対し、ケアアセスメントツールを使用したケアプランの立案・実施を課題とした。実習後、研究協力の同意の得られた学生6人によるフォーカスグループディスカッション(以下FGD)を実施し、その内容と実習の自己評価表を分析した。

オリエンテーションでは、日本訪問看護振興財団版のアセスメント・ケアプランツールの使用方法を約1時間指導した。訪問看護ステーションのうち1カ所は、既にMDS-HCを使用していたため学生もMDS-HCを使用した。もう1カ所の訪問看護ステーションおよび病院訪問看護部ではケアアセスメントツールは使用されていなかったため、学生は日本訪問看護振興財団版のアセスメント・ケアプランツールを使用した。実際の使用では、学生は訪問開始から間もない利用者を受け持ち、情報収集からアセスメント、ケア目標の設定までの一連の流れを行ったが、ケアマネジメントは行わなかった。また、学生がスタッフの前でケースプレゼンテーションをする機会を設け、指導教員および指導看護婦のほかスタッフから助言指導を得られるようにしたが、その他にも随時指導を受けた。

## V. 結果

在宅看護実習の学習効果を高める要因から、アセスメントツールの効果を分析した。FGDの結果から、直接的な学習効果と副次的なものに分別することができた。

### 1. 直接的な学習効果

直接的な学習効果として、(1)対象を捉える視点の広がり、(2)判断の助け、(3)系統的に情報収集できる、があげられた。学生の言葉として、「自分ではここが一番重要だと思っていたのが、客観的に見ると同じくらい重要なところがいっぱい出てきた」「病院のままでやってきて、環境にまで目がまわらないところがあったので、環境とくに気づかされる」「社会生活動作能力の『食事の用意ができる』というところに関しては、やっぱり身体的なほうに目がいってしまうので、そういう項目があると見やすい」という声が聞かれた。これらは、ケアアセスメントツールの使用が、自分が気づかない視点や客観的な視点での問題点の表出の助けになっており、生活の場で援助する訪問看護の特性を身に付けるための助けになっていることを示しているといえよう。

また判断の助けとしては、「自分でこれが大事と思っ

てもついているマルの個数でこっちの領域のほうに問題があるなどという、客観的に見る助けになった」「看護婦さんと同じ問題を抽出できるだけで、すごい自信になる」「自分のやったことになんか裏づけがあると思える」という声から、学生自身がツールを使用することにより、自分の判断を修正したり、また判断に裏づけを得たりすることで、学生が頭の中で判断=アセスメントしたことの助けとなっていることがうかがえた。さらにツールを使用することで、「情報収集すると見落としがちな点とかが、これがあることで項目とか、この情報がないと思ったら聞くという参考になる」「後から気づいた点をもう一度訪問に行ったときに見てみれば、確かにここも問題だなと新しく情報を拾ってこられる」と訪問に慣れない学生にとって、情報収集のガイダンスになっていたことがわかった。これらは看護過程の展開に関する事項であり、臨床実習と異なり利用者が近くにいなくても生じる学生側の問題を、ツールを使用することで軽減することができることを示している。しかしながら、医療依存度の高いケースに関しては当てはまる項目が少なく、優先度の高い問題と思われることがトリガーされないため使えない、という指摘があった。

副次的な学習効果としては、(1)現象と知識の統合力の必要性、(2)問題とニーズの違い、(3)ツールの結果だけでなく現実の対象者を見ることの大切さ、(4)解決困難な問題への取り組みの強化、の4点があげられた。学生は、現象と知識を結びつけることの必要性を、学生の言葉として、「栄養状態とか脱水状態とかは、そこにどう関係しているのかという基本的なところで気づかされたことが多く、ベテランの看護婦さんが自然と頭の中でやっていることを、私はこれを見ながらやったのかなと思った」「障害とコミュニケーションの問題というつながりもこれで気づいた」と述べていたが、ケアアセスメントツールは、学生が問題と感じている事柄と現象がどのように結びついているかを理解する助けになっていた。これは臨地実習の第三段階である総合実習が、今まで学んだ知識の統合を求められる、その学習過程を援助するものであり、ケアアセスメントツールが学習支援教材となっていたことを示すものといえよう。

また問題とニーズの違いは、現象とアセスメントでトリガーされた問題とのギャップにより、ニーズに気づくという効果があった。学生はギャップがあることで、「逆を知ることができ」「何か違う、何をすればよいのか」を考え、ニーズを満たすためにケアプランを立てていた。それは学生自身が感じたことのほかに、情報収集がある一時点で行われているため、療養者のその時の状態によってもトリガーされる問題が異なる、個人の性格・家族の状況などによりニーズが異なる、またツールにないこと

はあまり目を向けなくなる可能性があるのではないか、ということを考え、現象を見ることの大切さを学んでいた。

さらに問題に気づいていても、「変えようがない」と消極的に考えていたのが、トリガーされることで、「どうにか変えられる方法を考えてみようと思った」という言葉が聞かれたことから、問題に対する意識の変化をもたらしていたことがわかった。

しかし一方で、ケアマネジメントに関しては、他職種との連携や資源の導入などの場面を経験することがなかったため、「こういうものがケアマネジメントなんだ」という認識レベルにとどまった。

## 2. 学生の自己評価による目標の達成度 (図1)

学生の自己評価としては、「ケアアセスメントツールの使用法」「ケースの問題・ニーズ把握」「ケースに合った援助方法を考えられる」に関しては高い評価となっているが、「療養者や家族の意向を確認してケアプランを立案できた」「計画したケアを実践評価しケアプランを立案できた」という点に関しては、やや達成度が劣り、満足度が低いことがわかる。これは2週間の実習期間中毎日訪問するわけではない訪問看護実習では、コミュニケーションをとることに慣れてきた時点で実習が終わり、一歩深めてケアプランを立案したり、実践したりする余裕がなかったためと考えられる。

## VI. 考 察

以上のことを踏まえ、訪問看護実習でケアアセスメントツールを使用する上で留意すべき点として、1) ケアアセスメントツールの使用方法の理解、2) 実習指導者とのコミュニケーションおよび支援が得られる、3) 医療モデルに適用する困難さ、の3点があげられる。

今回の実習では、ケアアセスメントツールの使用に際して1時間のオリエンテーションというわずかな時間で、情報収集からケアプラン立案までの一連の流れを説明して実習に臨んだ。したがって、学生がケアアセスメントツールをきちんと使いこなせるか多少の不安をもっていたが、学生から使用に対する不安は聞かれなかった。しかし、使用方法の説明に際しては、事例を使用して説明したほうがわかりやすいという指摘があったことから、オリエンテーションで具体的にどう看護過程を展開していくかを示す必要があるだろう。また、ケアアセスメントツールを使用したことで、「今まで病棟では、思いつきでこれが健康問題かと思っていた。これをやることで

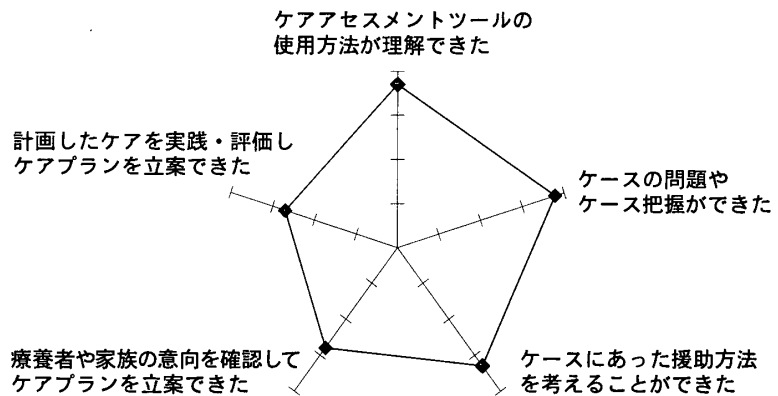


図1 学生の自己評価による目標達成度

客観的なものになる」という、肯定的意見が多く聞かれた。そのなかで、学生の一番の困難点としてあがったのは、「アセスメントで出てきた問題を、どうケアプランにつなげていけばよいかわからない」「どこまで問題として扱ってよいのか、それを使ってケアを提供すべきなのかがよくわからなかった」ということであった。これらのことから、ケアアセスメントツールは学生のアセスメントを助ける道具としては有用であるが、ケアプランを立てる段階では、経験の少ない学生にとって現実をどのように理解し、援助するかというケアプラン能力の付与には結びついていないことがわかった。したがって、ツールですべてを解決できるのではなく、現実の対象者を見て現象をどう理解するか、そして問題を解決するためにはどこにどう働きかければよいか、ということが大切であることを学生が理解できることが重要である。

在宅看護実習における学生の不安は、その場の状況で判断を必要とする「在宅看護の特性」から出てくるもので、実際のケアを提供している看護婦からの支援は学生の自信にもつながる。今回の実習では、現場の指導者が、学生の知識を統合したり、問題の整理、学生のアセスメントやケアプランについてこまめにチェックして下さったり、ケースカンファレンスを開いて学生のプレゼンテーションを行ったりしたため、学生も積極的にスタッフに質問したり、ケアについて働きかけるなどして、ケアプラン能力を高める努力がされていた。しかし、現場の指導者とのコミュニケーションや支援がとれないと、ケアアセスメントツールを使用する効果が低くなってしまったため、教員が事前にケースを訪問したり、実習中も一緒に訪問するなどし、学生の問題整理、知識の統合を援助できるような準備やサポートが必要と思われる。

また、今回の実習先の一つである病院訪問看護部は、医療依存度の高いケースに訪問を行っているため、看護婦の行うケアは医療処置や医療機器の管理などが中心となっていた。そのようなケースに対して、ケアプランの

ためのツールを使用する戸惑いが学生にあった。したがって、実習の目的を達成するためには、ケースの選択をより慎重に行う必要があったと考えられる。

総合実習で学生は、対象と環境との相互作用を力動的に把握し、対象の最適な健康状態を生み出すことができるよう、主体的に自らの役割と機能を発揮することを求められるが、ケアアセスメントツールは在宅という環境になれていない学生が環境を把握する手助けになり、また環境を生かしながら看護をする在宅看護の特徴を学ぶ手がかりともなりうる。したがって、ケアアセスメントツール使用に関してはサポートが必要であるものの、学生の学習支援教材として有用であると考えられる。

## Ⅶ. まとめ

以上のことから、ケアアセスメントツールの使用は、学生にとって在宅療養者の特性をつかみやすい、ケースをケアする時の視点の広がり、問題点の把握、問題への取り組みに積極性が出る、などの看護過程の展開に利点をもたらし、学習意欲を促進する一方、トリガーされた問題からケアプラン立案までの過程に支援が必要で、実習先との打ち合わせも十分行う必要があることが示唆された。

## 参考文献

- 1) 大塚真理子, 林 裕栄, 野川とも江: 今後の訪問看護を見すえた実習のあり方, 看護展望, 21 (12), 38-43, 1996.
- 2) 当間麻子: 地域看護・在宅看護実習の実際と今後の課題, 看護教育, 38 (9), 773-777, 1997.
- 3) 飯田苗穂, 神田清子: 看護基礎教育課程における訪問看護実習の現状と課題-過去2年間の訪問看護実習の分析-, 群馬大学医療技術短期大学部紀要, 17, 63-70, 1996.
- 4) 小池妙子: 訪問看護実習の位置づけ, 看護展望, 21 (12), 18-24, 1996.
- 5) 福島和代, 土井恵子, 蔭山潤子, 岸本郁美: より学生の学びを高められる実習を目指して, 看護展望, 21 (12), 25-28, 1996.
- 6) 村山正子, 杉本正子, 奥山則子, 安田貴恵子: 訪問看護実習の意義と問題(第3報)-実習指導方法の工夫とその効果-, 東京都立医療技術短期大学紀要, 6, 1-10, 1993.
- 7) 水谷聖子, 瀬藤泰代: 在宅看護実習のあり方に関する調査研究(1)-訪問看護ステーションに対する実態調査-, 日本赤十字愛知短期大学紀要, 10, 67-80, 1999.

---

**Abstract**

---

## **The Study on the Effects of the Home Care Assessment Tool of Student Practical Training in Home Visiting**

**Kazuko Naruse, R.N., M.P.H.<sup>1)</sup>, Hiroko Nagae, R.N., M.N.<sup>1)</sup>,  
Hiromi Kawagoe, R.N.<sup>1)</sup>**

The assessment tool was used for the purpose of deepening development of the nursing process and understanding of the care management concept in home nursing practical training in this study. To assess the effects of an assessment tool of the practical training, a focus group discussion had been conducted. Consequently, a few points were revealed as a direct learning effects, which were ① extending the viewpoint which catches the object, ② a tool functioning as an assistant of nursing judgment, ③ making collecting systematic information easier. Meanwhile, the necessity of the integration of knowledge and phenomenon, the differences between problems and needs, the importance of observing the subject not relying on the result of a tool, were recognized as subsidiary learning effects. Moreover, the attitude to tackle with difficulties was also indicated as one of such effects by students. These results suggested that the home care assessment tool was useful as a learning support material. However, a good understanding of the usage of an assessment tool as well as communication and support by staff nurses and a practical training tutor, was clarified to be essential in carrying out the practical training effectively.

**Key words**

home care assessment tool, practical nursing training on home visiting

---

1) St. Luke's College of Nursing, Community Nursing